



Title	ヴァルター・ベンヤミンとフランツ・ヘッセル
Author(s)	園田, 尚弘
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1986, 27(1), p.41-53
Issue Date	1986-07
URL	http://hdl.handle.net/10069/15224
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T00:46:12Z

ヴァルター・ベンヤミンとフランツ・ヘッセル

園 田 尚 弘

Walter Benjamin und Franz Hessel

Naohiro SONODA

序

F. ヘッセルの名はいまだ日本ではなじみがない。ドイツでもヘッセルの名はつい最近まで一般には知られていなかった。手頃なドイツ文学史の本にもその名は記されていない。彼の名は、長いあいだ、W. ベンヤミンとの関係において、あるいは『ベルリン散歩』の著者としてわずかな数の有識者にその名が記憶されていたと思われる。たとえばW. ベンヤミンの最初の伝記と銘うった W. フルトの著書にも、ヘッセルは一頁にも満たないスペースで紹介されているだけである。しかし『ベルリン散歩』を除いて新たに再版されることもなかった F. ヘッセルの著書のうち、1983年には『隠されたベルリン』が優れたベンヤミン研究者、B. ヴィテの解説つきでズーアカンパ社から再版された。それにつづいてヘッセルの自伝小説三部作の残りの二つ、『パリのロマンス』、『幸福の雑貨店』が刊行された。ドイツ20年代の作家として、日本でも、これから愛読するひとも多くなるだろう。

本稿ではヘッセルの経歴や著作について簡単に紹介を試み、次いでヘッセルとベンヤミンとの交友について、そしてW. ベンヤミンがヘッセルについて書いた文章を検討することにしたい。Hesselの著書についてのベンヤミンの書評を通じてベンヤミンの批評の態度、方法を分析してみることはこの小論の重要な課題である。

1 ヘッセルの生涯と作品

最初に、ヘッセルの生涯と著作について、主としてJ. フレコットに拠りながら、簡単にメモ風に紹介しておこう。

フランツ・ヘッセルは1880年11月21日、シュテットインで生まれた。1888年

にベルリンに移住し、幸福な幼少年時代を過した。銀行家で裕福な父の死によって遺産を相続した彼は、それによって独立した知識人の生活を送った。学生生活はミュンヘンで過し、神話学や考古学を学んだ。またゲオルグ・サークルの近くに位置し、『シュヴァーヴィングの観察者』をレーヴェントロウ伯爵夫人と出版した。幼少時よりこの頃までの生活についてはヘッセルの『幸福の雑貨店』に自伝的に記されている。1906年にパリに赴き第一次世界戦争勃発時まで滞在した。パリはヘッセルにとって第二の故郷になった。パリ時代の生活については、『パリのロマンス』にその反映を読みとることができるだろう。

戦後、ヘッセルは財産を失なって文学活動で暮らしをたてることになった。ローヴォルト社よりバルザックの翻訳を出版し、また雑誌『詩と散文』を出版、1925年には再びパリに赴き、ベンヤミンとともにプルーストの翻訳に着手した。1928年、ローヴォルト社に再び呼びもどされて、ヒトラー政権下で1938年までベルリンに暮らすことになった。ベンヤミンの表現を借りれば「5年半のあいだ箱のなかの小人のようにベルリンに腰を下ろしていた」¹⁾ヘッセルは妻の懇請によってようやく腰をあげてパリに到着した。ナチス治下で迫害されるユダヤ人と運命を共にすることを選んだために、ベルリンから腰をあげなかったということである。1939年秋、開戦と同時にヘッセルはコロンブに収容される。釈放後、家族とともにサナリ＝シュル＝メールに移住。1940年のドイツ軍によるフランス侵攻とともに再び収容所に送られ、このたびもまた特権を行使する意志なく、レ・ミュに収容される。収容所釈放後、1941年1月6日、ヘッセルはサナリ＝シュル＝メールで死亡した。

重要な作品として、自伝的小説三部作、『幸福の雑貨店』(1913) パリのロマンス(1920)、『隠されたベルリン』(1927)がある。小品集として『薄く色をつけた緬』(1926)、『後の祝いに』(1928)、『楽しみへの励まし』(1933)、があり、またベルリン案内の書『ベルリン散歩』(1929)、詩集等がある。この他、スタンダール、バルザック、プルースト、ジュール・ロマンの作品の翻訳が多数ある。

2 ベンヤミンとヘッセルの交友

ところで、ベンヤミンはいつヘッセルと知り合いになったのだろうか。ショレムの「W. ベンヤミン」の記述によれば、1925年に「二つの密接な個人的関係が結ばれた」²⁾とあって、H. v. ホーフマンスタールとヘッセルの名があげられている。しかしこれは必ずしも知り合いになったということを示すのではなく、ヘッセルとの交友をより深めたという意に解すべきであろう。事実、同書

には「ローボルト書店の主席編集顧問だったフランツ・ヘッセルと知り合ったとき、かれとロッテ・ヴォルフは、ヘッセルの短命だった雑誌、『詩と散文』にボードレールの翻訳をのせている。」³⁾とある。ヘッセルの雑誌にW.ベンヤミンの翻訳が出たのは、1924年8月、第8号であるから、ショレムの記述が正しいとすれば、ベンヤミンがヘッセルと知り合ったのは、1924年だということになるだろう。ともかくヘッセルとベンヤミンは、大いに気が合ったらしい。ローヴォルト社の編集顧問として、ベンヤミンの『ドイツ哀悼劇の起源』の出版を強く推薦してくれたのはヘッセルだったし、プルーストの小説の共訳者になったのもヘッセルであった。1926年には、この仕事のために、二人はパリに赴き、そこで親しく交際している。ショレムは「ベンヤミンは作家フランツ・ヘッセルを、さらに作家以上にその人間を重んじた。」⁴⁾とその関係を述べているが、事実、ベンヤミンがヘッセルの人柄に大いにひきつけられている記述を、彼の書簡から、数多く拾い出すことができる。

「目下、かれとの親密さは、プルーストの翻訳や、かれがパリに通じていることや、いろいろと気が合うことなどでいくぶん増している。」⁵⁾ (1926年5月29日)

「——ぼくにとって気持ちがよく、親しい協力者であるヘッセル——」⁶⁾
(1926年9月18日)

12才年上のヘッセルから、ベンヤミンは彼と親しく交際することで、彼の豊富な文学経歴とパリ滞在から得られた経験から多く学ぶことができた。彼を通じて、ベンヤミンはたとえば、K.ヴォルフスケールやA.ボルガーと知り合いになっている。ベンヤミンがヘッセルの本の書評を執筆したことで、また『パリのアーケード』の計画を共同でやりはじめたことなどで、友情はパリ帰還後のベルリン時代にあってもいよいよ深まっていった。事実、ベンヤミンが亡命後、1935年5月31日にアドルノに送った書簡でも、ヘッセルとの友情が『パッサージュ論』によってさらに深まったことを告げている。しかしナチスの政権奪取が彼らの交友を終らせてしまったようだ。しかしベンヤミンの書簡集によって、彼が亡命後も、ベルリンに残ったヘッセルの動静に危惧の念を抱きながら、関心を持ちつづけていた事実をわれわれは知ることができる。そして、ヘッセルがナチス支配下のベルリンにとどまっていたとき、「その生活を楽にしてやった」⁷⁾人物に良い感じを持っているとベンヤミンは書いている。これはベンヤミンがヘッセルに深い友情の念を抱きつづけていたことのひとつの証しであると考えることができる。

3 ヘッセルの著書に関するベンヤミンの書評概観

ベンヤミンは書評というものを幾分軽視していたふしがある。彼はある講演で、ドイツ批評の墮落について語ったことがある。彼にとっては、もっぱら書評が文芸批評としてまかり通っている当時のドイツ文芸批評のありようが、ロマン派による文芸批評の遂行と比較して、水準の低下以外の何ものでもないと思われた。「——この低下はおそらくは批評のかたちとして書評の独裁のなかにもっとも明瞭にあらわれている。今日の状態を、約百年前の批評作品と比較してください。シュレーゲル兄弟の人物批評、ゲルレスの民衆本についての書、クレーゲルの『グロテスク喜劇的なものの歴史』、アイヒェンドルフの『ドラマの歴史』などを考えてみてください。その時代にはこれら雄大な構想をもった一連の作品は、文献学的な才能と批評的なそれとの相互浸透をあらわしていたのです。』⁸⁾

ベンヤミンの比較的長い批評作品を考慮せず、書評ばかりを対象にベンヤミンの文芸批評家としての力量を測ると、例えばJ. ラダッツが『一方通行路いな袋小路』において展開したような文芸批評家ベンヤミン否定論に陥ってしまうおそれがないとは云えない。本論稿で主として扱われるベンヤミンのヘッセル書評も、ラダッツが攻撃の対象としたベンヤミン全集第三巻『批評と書評』にすべて含まれている。しかし、書評がベンヤミンにとってパンのための仕事の性格をもっていたにしろ、あるいは後年になるとこの種の仕事を口述で済ませていたにしろ、小さなスペースしか占めない書評の中にすら、ベンヤミンを考えるうえで興味深くまた重要でもある事柄を数多く見いだすことができるのである。

具体的に、ベンヤミンがヘッセルの著書について執筆した書評を列举してみよう。

1926年、ベンヤミンは『フランツ・ヘッセル』というタイトルの文章を発表している。これはヘッセルが同年に発表した『薄く色をつけた緬』についての書評である。

1927年には、ヘッセルがロマンと銘うった『隠されたベルリン』が発表されている。ベンヤミンは同年にこの小説の評を発表している。

1929年には、ヘッセルは『ベルリン散歩』を出版している。ベンヤミンはこのエッセイへの書評を、同年の『リテラーリッシェ・ヴェルト』に『遊民の回歸』というタイトルで発表している。

次に、以上三編の書評を検討してみたい。さらに直接的にヘッセルを扱って

はないが、ベンヤミンがその『ベルリン年代記』、『ベルリンの幼年時代』で名ざしているヘッセルの作品集『後の祝い』がこれにつけ加えられても必ずしも不適當ではないだろう。

4 - a 書評、『フランツ・ヘッセル』

ヘッセルの「薄く色をつけた緬」は28編の小品からなる書物である。パリの一日を歌った詩や頭のはげた中年男の悲哀を歌った詩を挿んで、軽妙な散文の小説が並んでいる。大人のための童話といった趣きのある『パントマイム』や『慈悲深い女』、カザノヴァやモリエールといった史上の人物をめぐる鋭い洞察に富んだ小散文作品、第一次大戦後の経済的窮迫期のベルリンに材をとったスケッチ風の作品などさまざまな趣好の小品が盛られている。それらの小品は、少しばかり悲哀感が漂うが穏和なもので、ヘッセルの人間解釈が控え目に盛られている。ベンヤミンのこの小品集に関する書評は『著作集』第Ⅲ巻に含まれ、2頁にも満たぬ短かいものである。しかしこの書評はベンヤミンにときとしてみられる一面的な書評とちがい、ヘッセルの特徴をきわめて適切に描き出した巧みなものである。

ベンヤミンは、今はもうなくなってしまったベルリンのある輸入食料品店で、日夜うなづいていた作りものの中国人の像がヘッセルだったと紹介する。ベンヤミンの解釈によれば、中国人の像がうなづいているのは、ひとびとにむかってそうしているのではなかったというのである。まず第一に中国人の像は、自らの店に陳列している商品の質の高さを肯けがっているのである。さらにこの中国人の像はうつむいた目で商店の窓ごしにベルリンの人間たちを見ていたのである。中国人の像は「すり減ったベルリンのアスファルトからベルリンの石がベルリンについて語らねばならぬ隠された事をすべて学のある高官よりも知っている。」⁹⁾

ベンヤミンはうなづいている中国人の人形の動作を解釈しながら、ヘッセルのこの作品の出来栄えに好意的評価を寄せ、後にかの『ベルリン散歩』を記すことになるベルリン通のヘッセルを読者に教示しているのである。

ベンヤミンは、ヘッセルの小品群のジャンルについては、それらがショートストーリーではなく、童話（メールヒエン）の領域に属する小さな物語（Kleine Geschichte）であると分類している。そしてそれらの小品群が表面にはモラルを示しながら、底には真実を秘めているのだと評している。確かにヘッセルの小品は、緊密に構成され急迫した印象を与えるショートストーリーには含まれないだろう、しかしまたすべての物語を童話というジャンルに包含してしまうに

は無理な小品も含まれているように思われる。この書評は『薄く色をつけた緋』をこえて、ヘッセルという人物に及んだ書評である。

ちなみに、ヘッセルのこの作品に対しては、ラダッツがベンヤミン批判をする際に模範的批評家として想定していたであろうK. トウホルスキーも好意的書評を寄せている。¹⁰⁾

4-b 書評、『隠されたベルリン』

ヘッセルのこの小説はパリで書かれ、1927年にベルリンで出版された。ロマンと銘うってあるが比較的規模の小さなものである。

物語の背景となる場所はベルリン。時は経済不況期の1924年、早春のある一日である。物語の核となる出来事は、落ちぶれた貴族の末裔の大学生ヴェンデリンと若く美しい人妻カローラの少しばかり錯覚をともなった愛の逃避行の企てと愛の消滅である。愛の逃避行を計画して別れた後のほぼ一日のあいだに、彼ら二人のまわりに、ベルリンの著名な人物たち、勢力をもった実業家、俳優や流行を追う女性、大学教授たちが次々に登場する。積極的な接近策、消極的だが強い愛情、あるいはその場かぎりの優しい愛情がヴェンデリンとカローラそれぞれに寄せられる。もともとどちらも気の迷いがある若い二人の試みは、子供の存在によって決定的に挫折する。

ベンヤミンは適切にもこの小説をアレクサンドリア風の歌芝居に擬する。時と場所の一致は、ギリシャ劇と一致する。そしてロマンに登場する人物たちは、モンタージュの手法で描写されている。ベンヤミンは、ヘッセルが描くベルリンが、通りも家も、部屋までも含めて古代と重なり合っている点を強調する。隠されているのは、ベルリンのそよ風のかすかなゆらぎや恋のいちゃつきではない。隠れているのは、「ただひとつの都会の、ひとつの街路の、ある家の、そしてこの本における出来事の規模とダンスのフィギュアの規模を自らのなかも含んでいる部屋の厳格な古代の形象一存在である。」¹¹⁾ 筆者自身には、ヘッセルのこのような志向は、小説を読む限り、ベンヤミンが感じるほど明確に迫ってこないが、ベンヤミン自身がヘッセルの志向を分け持っている点が注目される。「アルテンヴェステンが神話的時代に言質を取られる」ではじまる書評冒頭の趣旨は、ベンヤミン自身の著作『ベルリンの幼年時代』の『ティアガルテン』の最後の部分と照応している。ヘッセルの手引きをここに見ると同時にすでに書評がベンヤミン自身の後年の都市論の圏内に組みこまれている点に注目すべきだろう。

この書評ではさらに、二人のあいだに交友関係があったという事実から説明される観察が披露されている。ベンヤミンはわれわれにこの作品のモデル小説的側面について教えてくれる。作中の人物たちがヘッセルの書斎に出入するほどの人物をモデルにしたのか、ベンヤミンは容易に想像できたであろう。しかしこのロマンは決して謎解きの小説ではない。B. ヴィテの言葉を借りれば、ヘッセルはこの小説で、「自己と自らの友人達を、社会の権力構造からとり出してメールヒェンに変化させることをめざしている。」¹²⁾のである。

ベンヤミンのこの書評はヘッセルの小説の手法、特色についてさまざまのことを教えてくれる。しかし全体としてベンヤミンが読者に教えてくれる点は、ヘッセルの友人として得られたものである。彼はそこから、ヘッセルの生活史、交友関係に通じているものとして情報を伝えてくれるのである。

4-c 書評、『ベルリン散歩』

『フラヌールの回帰』はヘッセルの『ベルリン散歩』への書評である。W. ベンヤミンは1929年9月18日付G. ショレムにあてた書簡のなかで、「ヘッセルのベルリン論の書評を機にパッサージュ論の一端を『遊民の回帰』という題で表出した」¹³⁾と述べている。この書評が、『隠されたベルリン』以上に、ベンヤミン自身の著作活動の計画と密接に関連していることがこの文面からも読みとれる。

しかし手紙の文面よりももっと明瞭に、この書評がベンヤミンの後年の壮大なテーマ群に関係していることを明らかにしてくれるのは、書評とパッサージュ論との比較であろう。この書評で展開されるフラヌールの哲学的考察は、ほとんど内容の変化を蒙ることなく、そこに組み入れられている。もちろん『パッサージュ論』は19世紀のパリを対象として、そこに展開されるファンタスマゴリーを配置しながら、その歴史哲学的意味を問う試みである。ヘッセルは20世紀ベルリンを散索するのである。しかしベンヤミンにとって、ヘッセルはその長いパリ滞在によってフランス文人たちの遊歩を学んだ人物、そして遊歩の哲学をパリによって修得した人物である。遊歩者ヘッセルを記述することが、遊歩者ボードレールについての論考と重なりあってきても不都合はないだろう。ところで、それではフラヌールとは何であろうか。ベンヤミンがこの書評で述べているフラヌールの特徴は、まずフラヌールは都市が産みだした存在であるということ。それもローマ、ひとつの家や建物がすでに歴史的記憶に満ちあふれているローマではなく、パリで産まれたタイプだということである。しかしフラヌールが大衆と共にあるということを考えるとき、それはやはり近代の

産物なのである。大衆がヴェールの役割を果すところにフラヌールにとってのファンタスマゴリーが生じる。そのとき都市は「一方で風景、他方では部屋となって」¹⁴⁾ フラヌールを弁証法的に幻惑するのである。都市の何げない情景に風景を感じ、街路を住居としているフラヌールが求めているものは形象である。ヘッセルの場合、ベンヤミンによれば、この側面がもっとも明瞭に現われるのはアルターヴェステンについての叙述であるという。

フラヌールはしかし都会に何かを捜しにゆくのではない。フラヌールをみつめるものだけが、フラヌールには見えるのである。

パリにあっては気楽に実行できてもベルリンではうさんくさく思われる遊歩のテーマがベンヤミン晩年の『パッサージュ』論に引きつがれていることは既述した。しかしいまだこの時期の遊歩論には、『パッサージュ』や『ボードレール』にあって前面に出てくるフラヌールの経済的、社会的、政治的側面の分析は欠如している点は指摘されねばなるまい。しかしこの点に関しては、ヘッセルの「遊歩」についての思想が、歴史的背景を考慮に入れていないことと関連するのであろう。ヘッセルにとって遊歩、恋愛術、生活の享楽等においてパリはいわば模範である。そしてベルリンが遊歩術において遅れをとっているにしても、それは学ぶことのできるものである。ベルリンのブルヴァールについて述べながらヘッセルは言う。「タウエンツィエン通りやクーアフルステンダムは、ベルリン子に遊歩を教えるという高い文化的使命を有している。この都雅な活動が完全にすたれていないかぎり、しかしこれはまだ遅くはない。」¹⁵⁾つまりヘッセルにあっては、遊歩とは未だ学べる行為、歴史的に完結していない行為なのである。しかしヘッセルの『ベルリン散歩』出版後数年にしてドイツはナチズムの支配するところとなった。遊歩は問題にならない。ヘッセルの希望はむなしかった。有能で仕事熱心なベルリン子に閑暇と楽しみを学ぶように、そしてベルリンがもっと落ちついた都会になるようにと勧めたヘッセルの忠告はまったく実現するに到らなかった。そのような意味でヘッセルの本は今では古きベルリンを「物語った」歴史的記録となってしまった。

ヘッセルと同様に遅れて生まれてきた遊歩者ベンヤミンにとっても、遊歩はワイマル共和制下の不安と動揺に満ちた時期に学ぶにまだ遅くはない生活様式であっただろうか。

書評ではベンヤミンはヘッセルの散歩を共にし、ヘッセルの遊歩の哲学を明確にとりだしている。しかし遊歩者が受けとる経験が現代人のものであるかどうかには口をつぐんでいる。後に真の経験を欺しとられる現代人の焦燥と怒り

と怨恨について語ったベンヤミンにとって遊歩者は歴史的に回復できないひとつの記念碑的存在でなかったであろうか。

ベンヤミンは『ベルリン散歩』について、遊民がベルリンについて記した「記録簿、目ざめたる人によるエジプト的な夢解釈の本」¹⁶⁾と呼ぶ。そしてヘッセルのこの本がヘッセルの教えに耳傾けるものにとっていかに珍重さるべき本であるかを述べてその書評を締めくくっている。「ようやくベルリン市民が、自分の住む都会のなかに、ネオンサインによるものとはちがった約束の数々を追求するようになれば、この本はかれの愛措してやまぬものとなってゆくだろう。」¹⁷⁾

ヘッセルがベルリン市民に寄せた期待が虚しくなっていたのとまったく同じように、ベンヤミンがベルリン市民に寄せた希望も無になってしまったことを知っている後世の読者にとって、『ベルリン散歩』は、ベンヤミンとはまた別の感慨をもって読者が愛措してやまぬ本であるだろう。

4-d 『後の祝いに』

ベンヤミンが「フラヌールの回帰」を書いたとき、ヘッセルの遊歩の哲学の核心としてとりあげた文章は「後の祝い」からとられている。『ベルリン散歩』のテーマがすでに「後の祝い」中の作品「ジャーナリズムの予備校」に姿を現わしているという指摘を考へても、「後の祝い」をこの論稿で論じてみることは意味のないことではないだろう。いづれにしろこの書物は、ベンヤミン自身の都市論の構想にも重要な指唆を与えたのである。

ベンヤミンは自己のベルリン時代の回想録「ベルリン年代記」のなかで、彼を都市に導き入れてくれた人びとの一人としてフランツ・ヘッセルの名をあげて次のように云う。

「それから第五の案内者、フランツ・ヘッセル。わたしの考えているのは、のちになってやっと書かれたかれの本、『ベルリン散歩』ではなく、あの『後の祝い』のことであって、これはあたかも船を下りて波止場をぶらつく船員の足もとがまだ波のように上下に揺れるという、その港に捧げるのに似て、故国の都会に帰りついてから、わたしたちがともにしたパリの街歩きのために捧げられたのだった。——」¹⁸⁾

ベンヤミンがかくも熱烈な共感を捧げている「後の祝い」は1929年に出版されたヘッセルの短編集である。17編の短編が収められているが、例によってヘッセル独得の、都会生活に題材をとったスケッチ風の小品が並んでいる。そのなかで、ベンヤミンも前述の書評『フラヌールの回帰』に引用している『ジャ

ーナリズムの予備校』と題した作品が最も長く、また重要性においても第一等であろう。この作品については、ベンヤミンは、「住居」のモチーフが含まれている点、フラヌールの哲学が展開されていることを指摘しているが、それは正鵠を得た指摘である。この物語は、第一次大戦前にパリに滞在し、その青春の日々をここに過ごし、十数年たってふたたびパリを訪ずれたあるドイツ人のパリ滞在の手記のかたちをとっている。副題も「パリ日記」である。主人公は確かにパリでジャーナリズムに関する仕事を与えられ、パリで会うはずの人物の紹介状もたずさえている。しかし彼は偶然に出会うものにこそ価値をおくフラヌールである。「私は街路に属している。私は通行人である。」¹⁹⁾と彼は云う。そしてシャンゼリゼを歩くかわりに貧しくみすぼらしいパリの小路を歩きまわる。彼が信ずる信条は「捜すなかれ、されば見出さん」²⁰⁾である。「われわれを見つめるものだけをわれわれはみる。われわれができるのは—われわれがなにひとつしてやれないことに対してだ。」²¹⁾ベンヤミンが教えてくれるようにここにはフラヌールの態度・哲学がある。「パリ日記」の主人公はヘッセル自身でもある。そしてヘッセルとパリ散歩を共にすることによって、ヘッセルと同様に遅れてきた人間であるベンヤミンもまたこの哲学に開眼したのである。「都会のなかで迷うことの困難さ」を記述した「ベルリンの幼年時代」の一章「ティアガルテン」において『パリの農夫』をもじった「ベルリンの農夫」として、ヘッセルの姿が現われてくるのはこの意味で偶然ではない。

ヘッセルの主人公は第一次大戦前のパリを何の心わずらいもなく友人たちと徘徊した。このたびも彼は当時と同じようにパリの小路や横町を歩きまわる。幾多の若者の命を奪った戦争を辛じて生き残った主人公の目に戦後のパリと人間は一見奇異に写る。友人も年老い、知人もその境遇を変えている。いや自らも現在の必然性、金をもうけるという目的によってその行動は縛られている。にもかかわらず、彼の目は昔と変わらぬ同一のものを発見し、同一のものを認識する。フラヌールは恒常的なものを認識するというベンヤミンの指摘が妥当するゆえである。

この作品で展開される戦後のパリ描写は、ベンヤミンが『ベルリン散歩』評で指摘したフラヌールの一度おぼえこんだものに頑固にしがみつく性向によってなされている。ベンヤミンはこの作品のなかにヘッセルの著作活動の根本的姿勢を把握していると思われる。その意味で『ベルリン散歩』よりは『後の祝い』に、ヘッセルが自らに及ぼした影響を認めているのはベンヤミンとしては当然の判断であつたろうと思われる。

結 論

最後にベンヤミンとヘッセルの交友について、そしてベンヤミンがヘッセルについて書いた書評に関して総括的なことを述べておこう。

彼ら二人の交友を、例えばベンヤミンとホーフマンスタールとの交際と比較してみると、ヘッセルとベンヤミンとの関係が、いかに心やすく親密なものだったかが推察される。もちろん、ホーフマンスタールの場合はヴィーンに住んでいたし、ヘッセルよりはるかに権威ある芸術家であったのだから単純に比較することはできないが、しかしベンヤミンの書簡からうかがわれる二人の交友は文学上の話題の交換にとどまらず、私的領域にもわたるものであった。しかもホーフマンスタールがデビュー当時のいわばパトロン的存在であったとすれば、ヘッセルは、パリ、ベルリンの街歩きを共にすることによって、ベンヤミンの都市開眼への「手引き」をしてくれた心やすい友人であった。『ベルリンの幼年時代』には、ヘッセルがベンヤミンに与えた執筆への刺激が認められる。

ベンヤミンが書いたヘッセル関係の書評について云えば、そこには例えばホーフマンスタールの作品評にみられるあいまいな観点はない。²²⁾後期ホーフマンスタールへの批判を抱えこんだまま書かれた賞讃一点ばりの書評と比べると、もともとヘッセル自体がベンヤミンによって「小形式の作家」²³⁾と名づけられたこともあって、書評にもそれほど大げさな讃辞はない。しかしまた交友関係があったという事情からか、作品への痛烈な批判も含まれていない。年代順にこれらの批評を読んでゆくと、ベンヤミンが、書評という形式を借りて、だんだんと自己の文芸上のテーマにひき寄せて他者の本を批評する姿勢が明瞭になってくる。たんなる書評家で満足できなかったし、また書評家に終らなかった批評家の道筋をここにも見ることができるだろう。

註

- 1) Benjamin, W.: Briefe 2, 781f.
- 2) Scholem, G.: Walter Benjamin, S. 159.
- 3) Ebenda, 159f.
- 4) Ebenda.
- 5) Benjamin: Briefe 1, S. 429.
- 6) Ebenda, S. 431.
- 7) Benjamin: Briefe 2, S. 802.
- 8) Benjamin: G. S. Bd II, 2, S. 649.

9) Benjamin: G. S. Bd III, S. 46.

10) 余論、トウホルスキーの同書についての批評。

ベンヤミンの書評に比してみるとトウホルスキーの書評は、ヘッセルの著書に即してその読後感を卒直に伝えている反面、素朴で印象批評的である。トウホルスキーもヘッセルのこの著書に対してきわめて好意的である。彼はタイトルが気が利いていると賞讃し、小品のなかからは例えば『恋する汽関車』をとりあげ、その物語の愛らしさを喜び、あるいはヘッセルが女性を描写する際の巧みさを賞讃している。そしてヘッセルのもっとも巧みな小品をR. ヴェルザーのそれに比している。「ヘッセルの本をくり返しめくるのは喜びである」と述べてトウホルスキーはその書評をしめくくっている。もの書きを喜ばせる暖かい評価というべきである。

11) Benjamin: G. S. Bd III, S. 82.

12) Witte. B.: Nachwort des Romans, S. 136.

13) Benjamin: Briefe 2, S. 502.

14) Ebenda, S. 195.

15) Hessel, F.: Spazieren in Berlin, S. 131.

16) Benjamin: G. S. Bd III, S. 198.

17) Ebenda, S. 198f.

18) Benjamin: G. S. Bd VI, S. 469.

19) Hessel: Nachfeier, S. 102.

20) Ebenda, S. 153.

21) Ebenda.

22) 園田尚弘『ヴァルター・ベンヤミンとフーゴー・フォン・ホーフマンスタール、長崎大学教養部紀要、人文科学編第25巻第1号、1984参照。

23) Benjamin: G. S. Bd II, 1, S. 324.「Robert Walser」参照。

書 誌

1) Benjaminのテキスト

Benjamin, W.: Gesammelte Schriften (註ではG. S.と略称), bes. Bd III.

2) Hesselの著作

Hessel, F.: Teigwaren leicht gefärbt, Berlin 1926

Hessel, F.: Heimliches Berlin, Frankfurt a. M. 1982

Hessel, F.: Spazieren in Berlin, München 1968

Hessel, F.: Nachfeier, Berlin 1929

3) その他の参照文献

Adorno, Th. W.: Über Walter Benjamin, Frankfurt a. M. 1970

Fuld, W.: Walter Benjamin, München-Wien 1979

Radatz, F. J.: Sackgasse, nicht Einbahnstraße. In: Merkur 27/1973, S. 1065-1075

Scholem, G.: Walter Benjamin-Die Geschichte einer Freundschaft, Frankfurt a. M.
1975

Witte, B.: Walter Benjamin, Hamburg 1985

ベンヤミン著作集・晶文社

附記 本稿の執筆に際して、山田貞三氏には、ヘッセルの著書入手に関して多大の御助力をいただきました。記して感謝の意を表します。なおベンヤミンの著作引用のなかで日本語訳のあるものは、これを借用しました。

(昭和61年 4月30日受理)